自由からの逃走

ERICH FROMM/著　　日高六郎/訳

東京創元社発行

　　　　　報告者　松本倫明

~四章~　　近代人における自由の二面性

前章では、宗教改革の心理学的意味を解明した。本章では、資本主義の発展が、宗教改革と同様の心理学的影響を持つ事を示す。

近代社会の影響

近代社会は人間に二つの方法で影響を与えている。

|  |
| --- |
| 人間はよりいっそう独立的、自律的、批判的になった(P121L1) |
| よりいっそう孤立した、孤独な、恐怖にみちたものになった(P121L1) |

近代史は自由を求めた戦いに注意が向けられた。この戦いの相手は、国王、教会などの自分の外部にいる外的権威であった。人間はこの外部の敵から解放されたが、そこで新たな敵が表れる。その的は人間の自由の発現を内面から阻害する敵であった。

|  |  |
| --- | --- |
| 信仰の自由 | 宗教的な物への不信 |
| 言論の自由 | 自分で考えて発言する能力の欠落 |
| 行動の自由 | 常識、世論にとらわれる |

人間は、外的権威からは解放されたが、内面の束縛や恐怖に目を向けていないのである。

近代資本主義

資本主義の発達は、伝統の制限を超えて、個人が発展する機会を与える。一方、失敗する事、競争する事も自己の責任となった。資本主義は人間を伝統的な束縛から解放しただけでなく、積極的な自由を増加させ、責任を持った自我を成長させた。しかしそれは資本主義の結果の一つに過ぎず、同時に個人の孤独感、無力感を増幅させる。

超越的な神に対する個人と、非人間的な経済力に対する孤独な個人の構図が存在する。個人は巨大な経済の中の一つの部品に過ぎない。これが個人の無意味と無力感の源泉である。

自我